

【優秀賞】

『砂の女』——水と穴について

向井 ひな（大阪府 樟蔭高等学校 2年生）

紙の上に背筋を伸ばして並んでいた文字が突然舞い上がった。脱出不可能な穴に容赦なく太陽の光が降り注ぐ光景が目に見えた。作者の比喩に富んだ臨場感溢れる文体が、私を流動し続ける砂の世界へ誘ったのだ。そこには、形を持たないものの破壊力、空虚な理想、単色の都会、自虐的な優越感、「水」の欠乏、用意された結末——普段、私たちが目を背けている、ごくありふれたもので満ちていた。一度足を踏み入れれば、丸裸になって隠していたものが露呈してしまう気がした。しかし、私は、緊張と恐怖で汗に濡れた手でページを捲ることしかできなかった。

この物語は、一人の冴えない男が昆虫採集のためにある村に迷い込むところから始まる。その村は、砂を掻かないと住めないという奇妙な所だった。男は村民らに騙され、宿泊した女の家に、砂掻きの担い手として閉じ込められる。穴から出られないことを悟った男は抗議を続けるが、村民は聞き入れない。そこで、男は自力で脱出しようと様々な策をめぐらす。

男は蠢動を続ける間、自由だった地上の生活を回想することが多いが、その記憶は暗く、色彩に欠けている。教育や夢に疑問を抱き、自分が平凡な才能の持ち主であることを恥じるがゆ

えに、他人を嘲り、優越感に浸る。男が切望していた地上の自由とは、一体何であったのだろうか。私は、男の土に塗られた手と自分の手を重ね合わせてみた。今日では、科学技術の発展と極度の利便性の追求が目覚ましい速さで進められて来た。副作用として増加する、身なりだけでなく感情まで画一的な若者、灰色で塗り潰された都会。眠らなければ手に入れることのできない理想を求めながら、単調なリズムの繰り返しである日常に身を委ねる。そんな世界の中で、私たちは自由を求め声を上げる。男とて同じだ。誰かが決めた自由ではない、自分で手に入れる自由への憧憬の念は日々大きくなる。私たちはいつまで気づかないふりを続けられるのだろうか。

男は自由を渴望する余り、「水」の欠如を極度に恐れる。「水」とは、生きる希望だ。私はこの物語を作り話として読んでいたが、それは私に「水」が足りているからだ。家族や友人、流行の服などの「水」に恵まれた環境にあるからだ。だから、男の手に刻まれた深い皺に私の手相をびったりと重ねることはできない。作者の工夫のこらされた描写にも、男の熱烈な生への執着にも完全に酔えないでいる。私は、読者という穴の外にある立場から男の背中を俯瞰している。そこに砂の残酷さはあるものの、男の心情を完璧に理解することは難しい。しかし、だからこそ、必死に生きようとする男と自分の姿を重ねようとするのかもしれない。

最終的に、男は穴から脱出する方法を見つける。家主の女が自分の子を妊娠し、病院に運ばれた後、縄梯子が下ろされたままになるのだ。男は心臓の高なりを感じながら、梯子を使って、光が溢れる外へ出る。そこには求めていた自由があった。砂にまみれた生活から抜け出せるのだ。しかし、男は自ら穴に戻る。私は最初、男の心情が理解できなかった。待ち望んだ世界を、何故自ら

手放すのか。その理由は、冒頭にかかれていた。

「罰がなければ、逃げるたのしみもない」

私は背中がじんわりと湿る感触を覚えた。一行目で全ては明かされていたのだ。物語の結末など、初めから用意されていたのだ。

この話を読んで、男に完全なる共感はないが、ただの作り話として終えてはならない気がするの、自分の足元の危うさのせいだろう。絶え間ない流動を続けるこの世界は、砂の城よりも崩れやすい。もしかすると明日、日常が一気に崩れ落ちてしまうかもしれない。世界が崩壊する中、私は男の姿を思い出すであろう。懸命に生きようと努力しながらも、自ら穴に陥ってしまった小さな男の背中を。目標のある行動は何かを与えるが、目的のための行動は自らを減ぼすのだ。

私たちはこの本を通じて、決して交わることのない世界で、非現実的な逃亡を今もなお続ける男から、現実の世界の残酷さを学ぶことができる。いつか、私が「穴」に落ちた時、自分の持っている切符が「片道切符」と知った時、私はこの男のように遅く生きることができるのだろうか。そう考えると、男の行動は讃称に値するのかもしれない。

書名…砂の女

著者…安部 公房